

〈その他〉

看護基礎教育における異文化対応能力の向上に向けた教育演習プログラム ～模擬患者参加型演習の成果と課題～

Educational Exercise Program to Enhance Students' Cross-Cultural Competencies
-Findings and challenges of simulated-patient participatory project-

大堀美樹¹ 本谷園子² 松尾まき¹ 山崎千寿子¹ 中山純果¹ 谷本真理子¹

1 東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

2 東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科

Miki OHORI¹, Sonoko MOTOTANI², Maki MATSUO¹, Chizuko YAMAZAKI¹, Junka NAKAYAMA¹, Mariko TANIMOTO¹

1 Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

2 Postgraduate School of Healthcare, Postgraduate School, Tokyo Healthcare University

要 旨：〔目的〕 本学看護学科のプロジェクト活動において、看護基礎教育における異文化対応能力向上に向けた教育演習プログラムの開発に取り組んでいる。2019-2021 年度の実践を振り返り、成果と課題を報告する。〔方法〕 各年の実施状況やアンケート結果から成果と課題を整理した。〔結果及び考察〕 3 年間で 12 名の外国国籍の模擬患者、47 名の学生が参加した。「胃がん摘出術を受けた患者の看護」では異文化看護の基盤となる態度や姿勢を学ぶ機会となり、異文化理解の促進をねらった「糖尿病と診断された患者への看護支援」では文化的背景を考慮した対応や看護を検討する機会となったと考える。また、外国国籍の模擬患者との演習経験は異文化看護に対する意欲に繋がっていた。〔結論〕 本プログラムの成果や意義を確認できた。今後は学習効果の可視化に向けた評価ツールの作成、異文化対応能力向上に向けた学びを積み上げる教育体制を検討していきたい。

Abstract: Purpose: With the aim of enhancing students' cross-cultural competencies, our university is committed to developing and implementing educational exercises, as part of the global nursing competency promotion program in basic nursing education. In this paper we summarized the process and post-implementation reviews- findings and challenges of the 2019-2021 program implementations. Methods: Analyses of the programs conducted for three years in a row, of the questionnaire findings, along with the possible future challenges are discussed in this paper. Findings and Discussions: During the three years of program implementations, a total of 12 foreign-national simulated patients and 47 students participated. Nursing care of "a client having undergone gastric cancer resection" provided students opportunities to promote positive behavior and attitudes toward enhanced cross-cultural nursing practices. Care support of "a client diagnosed with Diabetes Mellitus" encouraged students to come up with appropriate nursing cares with due considerations of the client's cultural background. Hands-on experiences with foreign-national simulated patients motivated students to improve their cross-cultural competencies and provide culturally appropriate nursing cares. Conclusion: Participants involved recognized the positive outcome and significance of the program. It should be necessary to develop an evaluation

tool which can visualize the learning effectiveness and to create an education system to build up students' learning experiences and expand their cross-cultural competencies.

キーワード：異文化対応能力、異文化看護、外国人模擬患者、遠隔教育

Keywords：Cross-Cultural Competency, Transcultural Nursing, Foreign Patient Simulators, Distance learning

I. はじめに

COVID-19の流行により訪日外国人や在留外国人の全体数は減少したものの、2019年の改正出入国管理法の施行により外国人労働者は増加した。2021年には過去最高の172万人となり¹⁾日本で暮らす外国人や移住者は増加傾向にある。医療施設では誰もが安心・安全な医療を受けられるよう、外国人患者受け入れのためのマニュアルづくり、医療通訳者やICTの活用による通訳体制の整備などが進んでいる^{2,3)}。近年、看護分野でも、外国人患者への看護に関する研修や教育、能力開発が注目されている⁴⁾。本学医療保健学部看護学科でも、2018年度にプロジェクトチーム（グローバルナース育成プログラム開発プロジェクト;以下GNP）を発足し、多様な文化的価値を尊重する看護職の育成を目指してきた。プロジェクト発足当時は、教育や研修機会が少ないことが課題となっており⁵⁾、外国人患者への看護や異文化への関心を高める実践経験に焦点をあて、看護基礎教育課程における外国人模擬患者参加型の教育演習プログラムの開発を進めた⁶⁾。

他教育機関においても、プログラム開発や取り組みの報告⁷⁻¹⁰⁾が増加しており、看護基礎教育での教育の関心が高まっているといえる。看護師は、患者の文化を単に取り入れるのではなく、自分と患者との文化的な違いに気づくこと、自分自身が文化に影響を受けていることに気づくことが重要であると言われて⁴⁾。そのため、専門性を学ぶことと並行しながら、基礎教育早期から異文化対応を経験し、相手に関心を寄せながら人間対人間としての学びを積み上げていくことが重要であると考えられる。そして、異文化対応を学びながら看護の専門性が加わっていくことで、文化的背景や多様な価値観への配慮を含んだ看護実践の基礎づくりができると考えられる。

2019~2021年度に実施したプログラムから、成果とともに異文化対応能力を高めていくための課題が見えた。学生にとってプログラムの参加が段階的な学習の

機会となるように、内容や方法を吟味し、プログラムを修正してきた。そして、このプロセスにより、基礎教育初年度から学習機会を作ることの必要性が明確となった。そのため、改めて3年間のプログラム作成のプロセス・成果・課題を振り返り、基礎教育4年間における異文化対応能力を高めるためのプログラムの活用について検討することとした。

本プログラムの中心的なねらいは、外国人患者への模擬的な看護実践を通し、異文化対応能力を高める機会を提供することである。本プログラムにおける異文化対応能力とは、「様々な文化的背景を持つ人々との効果的かつ適切な交流・関わりを可能にする一連の認識・情緒的・行動的能力及び特性」¹¹⁾としている。効果的かつ適切な交流という点で、学生が日本語以外の言語をコミュニケーションツールとして看護に用いる経験も重視しており、本プログラムは、まずは国際共通語である英語を用いることとした。グローバル化への対応という観点からも、英語表現の習得もねらいの一つとした。

II. 活動の実施・プロセス (表1、図1)

参加学生・外国人模擬患者への倫理的配慮として、プログラム及びアンケート参加は自由意志によるものであり、参加しないことによる不利益は生じないことを説明した。また、データは適切に管理すること、データを取り扱う際や外部への報告・発表の際は個人が特定できないように取り扱うこと、全ての学業成績に関与しないことを伝えた。

1) 2019年度の活動成果と課題

2019年度の活動は、「外国人模擬患者参加型演習プログラムにおける看護学生の認識の変化」⁶⁾にて報告した。概要は表1および図1の通りである。外国人模擬患者と実際に関わり、看護実践を経験したことにより、相手を理解しようとする思いや看護師としての

表1 教育演習プログラムの詳細

年度	時間・場所	参加者	演習準備	演習	
2019年度	1日目 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ限 (教室) 2日目 Ⅲ・Ⅳ限 (演習室)	3年次生 23名	【1日目：演習準備】 ・オリエンテーション(30分) ・グループワーク(15分) -声かけ内容などを検討- ・英語講義(60分) ・グループワーク(60分) -想定シナリオの作成- ・英語準備と演習準備(80分)	【2日目：演習】 1.演習 1)2名1組で声かけ、痛みの評価、一連のフィジカルイグザミネーション(15分) 2)グループでデブリーフィング(10分) *1)・2)を繰り返し回を重ねる毎に良い実践ができるように工夫してもらった。 3)全員実践が終了したら模擬患者さんからフィードバックをもらった。 2.全体デブリーフィング(25分)	
2020年度	3日間ともに Ⅲ・Ⅳ限 (オンライン)	3年次生 12名	【1日目：演習準備】 ・オリエンテーション(30分) ・グループワーク(30分) -想定シナリオの作成- ・ワーク内容の共有(15分) ・英語準備(60分) ・演習準備(30分)	【2日目：演習1】 1.演習1<情報収集> 1)演習1-1[情報収集](20分) デブリーフィング(15分) 2)演習1-2の準備 3)演習1-2[追加の情報収集](15分) デブリーフィング(10分) 2.全体デブリーフィング・感想(20分) 3.演習2に向けた準備(45分)	【3日目：演習2】 1.演習2<看護支援> 1)演習2-1[教育支援](15分) デブリーフィング(15分) 2)実践2-2の準備 3)演習2-2[追加の支援](10分) デブリーフィング(10分) 2.全体デブリーフィング、模擬患者から 出身国の文化などの紹介(合計30分)
2021年度	3日間ともに Ⅲ・Ⅳ限 (オンライン)	全学年 12名	【1日目：演習準備】 ・オリエンテーション(30分) ・講義(30分) -異文化看護について- ・グループワーク(30分) -想定シナリオの作成- ・ワーク内容の共有(20分) ・英語準備(30分) ・演習準備(30分)	【2日目：演習1】 1.演習1<情報収集> 1)演習1-1[情報収集](20分) デブリーフィング(10分) 2)演習1-2の準備 3)演習1-2[追加の情報収集](10分) 模擬患者参加のデブリーフィング (20分) 2.全体デブリーフィング(20分) 3.演習2に向けた準備(50分)	【3日目：演習2】 1.演習2<看護支援> 1)演習2-1[教育支援](15分) デブリーフィング(10分) 2)実践2-2の準備 3)演習2-2[リトライ](10-15分) 模擬患者参加のデブリーフィング (20分) 2.全体デブリーフィング、模擬患者から 自国の文化など紹介(合計40分)

姿勢や態度、コミュニケーションの大切さに気づくと
いった学びが得られた。

次年度への課題として、4点上がった。1点目に、
定型的な場面設定で取り組みやすさはあったものの文
化的背景を捉える仕掛けが不足していたこと、2点目
に、学生・模擬患者ともに、演習の補助教材として準
備した想定シナリオに頼り気味となり、双方向の対話
となりにくく、自然なコミュニケーションを行う仕掛
けが不足していたことであった。3点目に模擬患者募
集に関する課題である。在留外国人の人材派遣会社
に依頼し、応募はあったものの、段階を追った事前
準備が難しかった。加えて、2019年度の演習直後
からCOVID-19感染防止の観点から、接触を伴う演習
が困難となった。模擬患者が術衣を着用し、ベッド
上で演じたことのリアリティや、対面での表情や動き
も含めたリアルなコミュニケーションや反応から得ら
れた学びも多かったため、対面演習が難しいという
状況は、大きな課題となった。

2) 2020年度の活動

(1) 演習のねらいと学修目標

前年度の課題を含め、2020年度は、患者へのセルフ
ケア支援に向けて生活背景を捉える中で必然的に文化
的背景に触れることができるようなテーマを選ぶこと
とし、「糖尿病と診断された患者へのオンライン看護

支援」とした。糖尿病の治療は食事療法、運動療法、
薬物療法が基本であり、模擬患者との関わりの中で自
然に文化的背景への理解を深められることをねらった。
また、1、2年次に疾病概論及び看護について学習
していたことから、外国人模擬患者への応用が可能
であると考えた。目標は、①外国人患者の文化的背
景の多様性を理解する、②文化的背景の違いを含め
対象を理解するための英語表現方法を身につけるとし
た。糖尿病の患者設定により、模擬患者は普段の自
分の生活をそのまま語ることが可能となり、シナリオ
に頼りすぎずに対象とのコミュニケーションに集中
できるように設計した。学生の対象者は、実習での
看護実践経験を有する3年次生の参加希望者とした。

(2) プログラムの内容と工夫

事例報告¹²⁾を参考に、情報収集やコミュニケーション
から対象を理解し、関わりながら支援を行うという
2部構成の演習とした。COVID-19の感染防止を考
慮し、web会議システムを用いたオンラインでの演習
とし、テレナーシングでの看護実践の設定とした。患
者背景は、同意を得た上で模擬患者自身の情報を用
いて、生活習慣については嗜好品や日頃の行動を誇
張してもらい、疾患の特徴を反映した。

プログラムは3日間とし、1日目はグループ毎に情
報収集や声かけ内容を検討し、想定シナリオのアレ
ンジと英語準備を行なった。2日目は演習1<情報収
集>

である。演習1-1)を実施後、個人の実践と情報収集の成果を振り返るデブリーフィングを挟み、演習1-2)で追加の情報収集を行なった。その後、模擬患者から一言フィードバックを受けた。演習2に向けた準備に取り組み、3日目は2日目と同様の流れで演習2<看護支援>を行なった。最後に全員での振り返りの時間を設け、模擬患者から、フィリピンの食文化や、スリランカの社会福祉制度等、それぞれの出身国特有の文化を語ってもらった。

(3) 模擬患者の募集と事前準備

模擬患者は、プロジェクトメンバーの知人から紹介を得た。模擬患者に、予めプログラムに関する資料を送付し、オンラインで打ち合わせを行った。役作りを依頼する上で、糖尿病の原因や特徴を説明した。

(4) 実施状況及び成果と課題

学生参加者は3年次生12名であり、4グループとした。プログラム前後で任意のアンケートを行い、英語への興味・自信、外国人患者への看護の関心・自信の4項目について4件法で回答を求めた。全項目、参加前よりも興味関心度の向上やより自信がついたとの結

果であった。さらに、参加前の自分の能力の状態を1として参加後に5段階でいくつになったか、2020年の目標に基づく6項目について回答を求めた。その結果、「異文化理解」3.75、「外国人患者の心情に配慮した関わり」3.42、「異文化に対応した医療的介入」3.42、「医療英語を用いた情報収集」3.33、「英語を使ったコミュニケーション」3.33、「医療英語の知識」3.00であり、全項目3以上となっていた。対象の文化的背景に目を向け、異文化理解を促進することにつながるプログラムであると評価できた。自由記述では、「今回は聞きとることで精一杯だったが、英語でコミュニケーションをとれるように頑張りたいと思うきっかけとなった。」「受け答えの対応の選択肢が多ければ多いほどコミュニケーションが豊かになり、質が高まると感じる事が出来た。」「3日間で英語を上達させることは難しくても、少しでも外国人の方と関わる機会があることで今後の自分自身の課題が明確となり、モチベーションアップにもつながった。」と、学びと共に異文化対応能力向上に向けた学生の意欲を引き出すことができたと考えられた。

2019年度

「胃がん摘出術を受けた術後1日目の患者の看護」

【課題】

- ・文化的背景を捉える仕掛けの不足
- ・双方向の対話を促す仕掛けの不足(シナリオに頼りすぎてしまった)
- ・模擬患者募集や準備
- ・Covid-19による対面演習への影響

【場面】術後1日目の全身状態の確認

(問診・フィジカルイグザミネーション・声かけ)

【方法】対面模擬演習

【対象】3年次生希望者

【目標】1)英語コミュニケーション力の向上

2)異文化理解の促進

【工夫】・想定シナリオ作りと英語準備時間の確保

- ・模擬患者は術衣を着用し、想定シナリオをもとにした役作り
- ・英語がうまく話せなくても良いこと・失敗して良いことを強調
- ・模擬患者に学生のレディネスを共有

2020年度・2021年度

「糖尿病と診断された患者へのオンライン看護支援」

2020年度

【場面】糖尿病と診断された方へのテレナーシング(情報収集と教育支援)

【方法】オンライン模擬演習

【対象】3年次生希望者

【目標】1)文化的背景の違いを含め対象を理解するための情報収集とそのための英語表現を身につける
2)外国人患者の文化的背景の多様性を理解する

【工夫】・英語資料や想定シナリオを準備

- ・対象に応じた情報収集内容を検討する時間(シナリオのアレンジ)と英語学習時間を確保
- ・シナリオに頼りすぎず、関わりの中で情報収集を行うことを強調
- ・模擬患者は自身の基本情報(年齢・職業など)を使用しつつ、嗜好品や健康リテラシーと病気に対する思いに関する役作り

【課題】

- ・「異文化看護」に関する導入の不足
- ・模擬患者と学生の相互理解を促す仕掛けの不足
- ・継続した3日間のプログラムでは、学生の自習時間が確保しづらいこと
- ・3日間のプログラムでの異文化対応能力獲得の限界→基礎教育期間での異文化対応経験・学修機会の不足

2021年度

【場面】【方法】2020年度同様

【対象】全学年の希望者

【目標】1)外国人模擬患者との英語コミュニケーションを通して、異文化をもつ対象を理解する
2)外国人患者の文化的背景の多様性を理解し、文化的多様性を配慮した看護を考える

【工夫】・1日目に、異文化看護に関する講義を導入

- ・学年を超えたグループ構成
- ・演習中の模擬患者参加型デブリーフィング時間の設定(相互理解の機会の確保)
- ・3日目のプログラム日を調整

【継続した学修機会の提供に向けた課題】

- ・持続可能な方法の検討
：全学年参加可能な日程調整の難しさ
外国人模擬患者協力者の確保
- ・評価の可視化
：異文化対応能力評価ツールの作成
- ・学びの積み重ね
：語学力(英語力)の向上機会の確保
学びを積み上げていくシステムの構築

図1 教育演習プログラムの実施過程

2020年度の活動では、新たに4つの課題が見出された。1点目に異文化とはどのようなものであるかをイメージするために必要な基礎知識を補うことである。2020年度は異文化理解のポイントが上昇していた点は評価できたが、異文化看護を概論的に捉えて演習に入ること、より効果的な気づきや学びにつながると考えた。2点目は、模擬患者と学生の相互理解を促す仕掛けの不足である。豊岡¹³⁾は外国人医療のために最も必要なことは、外国語ではなく、知識、知恵、経験であること、文化間看護の基本は外国人患者と看護師の相互理解であると述べている。相互理解に必要な、双方の習慣の違いの認識、双方の医療制度に対する認識、歩み寄りについては2020年度のプログラムの中で学びの要素があると考えられた。しかし、2019年度より会話の広がりは見られたものの、伝えることや聞くことに精一杯で一方向的になりがちであった。対象理解は深まったが、相互理解には至っていなかったと考えられる。3点目は、連続した3日間では学生の自主学習時間の確保が難しかったことである。カリキュラム上、3年次は英語に触れる機会が少ないため、発音の確認など個人の練習時間確保のニーズが聞かれた。4点目は、3日間のプログラムでの異文化対応能力獲得の限界である。学生は、プログラム参加により異文化対応能力向上に向けた学習意欲を得ることができた。しかし、次の学習に繋げる機会が得られにくいことが本学科の現状であり、課題である。異文化対応能力の向上は短期間・単発では困難であり、基礎教育の中で複数回経験できる環境が必要であると考えた。

3) 2021年度の活動

(1) 演習のねらいと学修目標

2021年度は学生の対象を全学年とした。1年次から4年次生まで継続的に異文化対応の経験を積み重ねる機会を得られるように対象を広げることとした。1年次生は糖尿病患者への看護は未習であり、2年次生は看護学実習の経験のみであるが、各学年の既習の知識を活用し、外国人模擬患者への看護を経験できるようにプログラムの内容を見直した。

演習テーマ・方法は前年度同様とし、目標は①外国人模擬患者との英語コミュニケーションを通して、異文化をもつ対象を理解する②外国人患者の文化的背景を理解し、文化的多様性を配慮した看護を考えるとした。

(2) プログラムの内容と工夫

1日目に「異文化看護について」と題した基礎的知識習得のための講義を取り入れた。全学年を対象としたため、各学年の視点を活かした看護の検討ができるよう、学年を超えたグループ構成とし、学生同士のディ

スカッション時間を多く設けた。英語に関しては、完璧な英語でなくてもよいことを強調し、相手の考えや思いを汲み取るコミュニケーションを大事にすることを掲げた。また、模擬患者との相互理解の促進をねらい、デブリーフィングは模擬患者参加型とした。

(3) 模擬患者の募集と事前準備

模擬患者はプロジェクトメンバーの知人に協力を依頼した。新たに、「Simulation-Guideline」の資料を作成し、前年度同様、オンラインで打ち合わせを行った。

(4) 実施状況及び成果と課題

参加者は1年次生1名、2年次生4名、3年次生6名、4年次生1名の12名であった。全学年が参加できる年度末に開催した為、4年次生は1～3年次生のサポート役として位置付け、学年混合の4グループとした。

プログラム前後に2020年度同様の項目のアンケートを行った。英語及び外国人患者への看護に関して、参加前に比べ興味関心が上がり、英語や看護の自信がついた結果となった。プログラムの参加により変化したと思う能力6項目は、平均点の高い順から「異文化理解」3.80、「外国人患者の心情に配慮した関わり」3.80、「英語を使ったコミュニケーション」3.40、「異文化に対応した医療的介入」3.00、「医療英語を用いた情報収集」2.80、「医療英語の知識」2.60であった。上位3項目は前年度より平均点が上昇していた。特に「外国人患者の心情に配慮した関わり」と「英語を使ったコミュニケーション」の向上は、模擬患者参加型のデブリーフィングによる効果が一つの要因として考えられる。一方、2021年度はプログラム時間内に医療英語のレクチャーや英語内容を吟味する時間を十分に取ることができなかったため、「医療英語の知識」「医療英語を用いた情報収集」の結果に影響があったと考えられる。自由記述では、「言葉の受け取り方が異なることや言葉だけでなく身振り手振りや図を使ってコミュニケーションをとる大切さを学べ、同じ日本人であっても大切にしていきたいと考えた」「英語が苦手でもこのようにコミュニケーションを取ることが可能であることに気が付けたので良かった」「異文化について学ぶことができ、さらには改めて看護について考える機会となった」など異文化対応とともに、これまでの看護を振り返る機会となっていた。学年混合グループは、糖尿病の知識や実習経験のある上位学年の発言を受けながら、下位学年が質問内容を考えていくなど、学年を超えて役割分担し、協力する姿が見られた。

4) 模擬患者からのフィードバック

模擬患者役は、異文化を持ち英語を話す方に協力を依頼している。3年間で12名、様々な国の多様な背景

を持つ方の協力が得られた。プログラム終了後の任意のアンケートでは、「演習への参加が自身にとっても有益だったか」の質問に対し、全員から大変そう思うとの回答が得られた。

自由記述での回答において、2019年度は、学生の態度や姿勢、配慮に対する評価が得られていた。2020年度は、「学生は最初不安そうだったが演習プロセスを経てしだいに自信をつけていったと思う」「学生は私が好きではない食べ物に関する食事指導でよく工夫していた」「パワーポイントを使い私の健康がどのように改善されるか様々な方法を示してくれたので分かりやすかった」「看護師が英語で話してくれることは日本語が話せない外国人や家族と住んでいない外国人にとってとてもありがたいと思った」と、患者の視点から看護支援に対して肯定的なフィードバックが得られた。2021年度は、「学生はとても親切だった。彼らが英語のスキルを向上させ、さらに経験を積めばベストな対応ができると思う」「初日は緊張している様子が伺えたが2日目には身振り手振りも増えてコミュニケーションも上手に取れるようになっていた。この演習は今後外国人患者と関わる際にとても役に立つと思う」と異文化対応能力への評価が聞かれ、プログラムについて「学生にとっても私にとっても異文化を知ることができてとてもいい勉強になった」「看護教育のリアリティを体験できる良いプログラムだと思う」との評価があった。学生・模擬患者共に異文化理解を深め、互いの学びに繋がったと言え、模擬患者と看護学生の相互理解に寄与するプログラム内容であると評価できた。

Ⅲ. 考察

本プロジェクトでは、計画・実施・評価を繰り返し、連続性を持ってプログラムの作成を進めてきた。プログラムの特徴の1つは、模擬患者参加型演習という点である。異文化を持ち、外国語を話す方々が模擬患者役となって行う看護演習は、学生同士での演習とは異なるリアリティが生まれる。また、上手いかわくても良い、やり直しても良いという環境下は、正直かつ率直に話すことを可能にし、学生の心理的安全性が担保されやすい。心理的安全性は、目標に向かって協働することやパフォーマンスを促進する¹⁴⁾と言われており、学生なりに保有している能力を発揮しやすい方法での学びの機会となっていると言える。

異文化理解や国際的な視野を広げるという点では、海外研修の機会があり、本学はじめ多くの看護系大学で語学・異文化体験や保健福祉領域の専門的交流を目

的に短期海外研修が行われている^{14,15)}。一方、本プログラムは学生の金銭的な負担が少なく、日本に住む外国人患者への看護を直接的なコミュニケーションを通して経験できることが有益な点である。1年次からプログラムに参加することで、早期から異文化対応への関心を高めるための学習の機会が得られ、異文化対応能力を高めるための基盤づくりが期待できる。さらに、学年が上がるごとに培われる専門的な看護の知識を加えながら、模擬患者演習の経験を積むことで、看護に必要な異文化対応能力の獲得に発展していくと考えられる。

加藤¹⁶⁾は、海外研修は「グローバル人材」の重要な要素と考えられる「語学力」に焦点が当てられていないことや、十分に英語学習の時間が確保されていないこと、英語で専門分野を学ぶことを意図すると専門の内容理解が低くなることを報告している。本プログラムも、2019年度はできるだけ正確な英語を使用できるように英語の想定シナリオを用いながら演習を行った。その結果、相互作用のコミュニケーションという点で課題が残り、2021年度の演習では相互理解につながるコミュニケーションが出来たが、言語力に十分重きを置くことが出来なかったという同様のジレンマが生じた。我々は、言語や文化の多様性に応じた看護実践や異文化対応能力の向上を目標としており、異文化対応能力を高めるためには言語力の向上も望まれる。3日間の教育演習プログラムを4年間経験した場合でも、この両者を網羅することは困難であるといえ、基礎教育4年間で、言語力を含む異文化対応力向上につながる機会の確保が必要であると考えられる。

模擬患者からは、「自分自身にとっても良い機会となった」、「異文化を知る良い勉強になった」との声もあり、模擬患者にとっての参加意義が伺えた。本プログラムは、学生・模擬患者双方にとって有意義な教育プログラムとなっている可能性が考えられる。

Ⅳ. 今後の課題

3年間の活動を俯瞰し、今後の課題として3点考えられた。1点目は継続的にプログラムを実施する仕組みづくりである。模擬患者は機縁法で依頼しているが、在留資格を持つ外国人は留学生及び労働者が多く、日程調整の難しさや毎年模擬患者を依頼することが難しい一面がある。また、全学年を対象としたことで基礎教育課程の中での継続的な学修機会の確保が可能となったが、日程調整の難しさが生じた。無理がなく効果的な時期での開催の検討が必要である。

2点目は、プログラムによる効果を客観的に評価す

る仕組みづくりある。現在、異文化対応能力や異文化看護の実践力を評価するツールは見当たらず、学びの効果や学修成果を可視化することが難しい。効果を測定することにより、学生個人レベルの成長を可視化することや、プログラムの評価、他の学習方法との比較が可能となると考える。

3点目は学びの積み上げであり、最も重要な課題である。2019年から日本国際看護師の育成も始まった¹⁷⁾。グローバルに対応できる人材育成が着目され、教育ニーズは益々高まると予測される。2021年度に本学看護学科でも、GNPのメンバーを中心とした「グローバル化への対応検討プロジェクト」が発足し、看護学科におけるグローバル人材育成にかかる人材像の明確化に取り組んでいる。基礎教育4年間でのグローバル人材の育成のために、その基盤となる、経験や努力によって自分の能力を向上させることができるといった学生の「グロースマインドセット」を育むこと、外国語をコミュニケーションツールとして積極的に用いようとする意欲や、非言語的コミュニケーション力、通訳機器を有効活用する力を育むなどの多角的な観点からの教育の必要性を考えている。現在のカリキュラムの主要な学修機会を整理し、効果的な時期に演習プログラムを実施することで学習効果が期待できると考える。英語教育や国際看護論をはじめとした既存のカリキュラムや海外研修の機会を教育演習プログラムと連携させながら、異文化対応能力向上に向けた演習経験や学びを積み上げていくシステムの構築を目指していきたい。

謝辞：本プロジェクトに協力いただいた模擬患者役の皆様にご心より感謝いたします。

なお、プロジェクト活動は東京医療保健大学看護学科特別研究費及び、東京医療保健大学学長裁量経費の助成を受けて実施した。

引用参考文献

- 1) 厚生労働省. 「外国人雇用状況」の届出状況まとめ
<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000892808.pdf>(2022年5月13日アクセス)
- 2) 明石雅子, 小川弘美, 菅沼景子, 他. タブレットを用いたオンライン面会の取り組みと課題. 日本渡航医学会誌 2021; 15(2):110-114.
- 3) 野村楊子, 亀井哲也, 重野亜久里. ロールプレイを用いた多言語音声翻訳機と医療通訳者の通訳の質評価に関する研究. 国際臨床医学会雑誌 2021;4(1):38-42.
- 4) 原明子, 柳澤理子. 日本人看護師が外国人患者をケアする上で必要な能力 文献レビュー. 愛知県立大学看護学部紀要. 2020;26:17-28.
- 5) 谷本真理子, 山崎千寿子, 本谷園子, 他. 日本人看護師の外国人患者対応力向上に向けた実践的課題探究の取り組み. 東京医療保健大学紀要 2019;14(1):145-152.
- 6) 大堀美樹, 山崎千寿子, 本谷園子, 他. 外国人模擬患者参加型演習プログラムにおける看護学生の認識の変化. 東京医療保健大学紀要 2020;15(1):1-10.
- 7) 落合亮太, 松本裕, 大河内彩子, 他. 看護大学1年生を対象とした看護英語教育プログラムに関する実践報告. 横浜看護学雑誌2017;10(1):29-35.
- 8) 宮津多美子, 藤倉ひとみ, GROW Deborah. シミュレーションで学ぶ異文化看護の実践 看護学生を対象とした外国人模擬患者演習報告. 順天堂大学医療保健学部医療看護研究21: 2018; 14(2):1; 9-18.
- 9) Huffman Jeffrey, 井上 麻未, Gonzalvo Binzee, Suzuki Kerry. Non-Japanese Simulated Patient Sessions in an English Course for Japanese Nursing Students. 聖路加国際大学紀要. 2019;5:1-7.
- 10) 古川 智恵. 日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定したシミュレーション演習-看護大学生の学びの評価-. ヒューマンケア研究学会誌2021;12(1):29-35.
- 11) Bennett, J. M. Transformative training: Designing programs for culture learning. In Contemporary leadership and intercultural competence: Understanding and utilizing cultural diversity to build successful organizations, ed. M. A. Moodian, Thousand Oaks, CA: Sag 2008;95-110.
- 12) 丹村敏則, 原田ゆみ, 山下愛, 他. 専門外来から日本語がまったくわからない外国人に対して糖尿病指導チームメンバーにより効果的な糖尿病指導が実践できた例. プラクティス 2014;31(1):120-123.
- 13) 豊岡慎子. 日本における外国人医療—文化間看護の現状と推進に向けて—. 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 2015;16:135-144.
- 14) エイミー Cエドモンドソン. 野津倫子(訳). 恐れのない組織—心理的安全性が学習・イノベーション・成長をもたらす—. 第1版. 東京. 英治出版株式会社2021;43-44.
- 15) 蛭田由美, 久保宣子, 山野内靖子. 看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究 わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態. 八戸学院大学紀要 2017;54:39-54.
- 16) 加藤藤. 看護系大学における短期海外研修の現状と課題. 石川看護雑誌 2020;17:1-10
- 17) 南谷かおり, 高橋弘枝, 梶山直美, 他. 日本国際看護師の教育と認証について. 国際臨床医学会雑誌 2021;4(1):55-59.